

# 〈わたし〉の図書館

基本コンセプト

## 新しい公共のために

小千谷市は、古くから縮の産地として発展し、その財をもとに教育の街、病院の街として知られるようになりました。その病院が移転した跡地に建つ新しい小千谷図書館は、錦鯉の里や楽集館などの**既存公共施設をつなげる重要なピース**になるはずだと考えます。

一方、現代は、公共サービスが誰にとっても「だいたい同じ質」を保てた時代では既ありません。小千谷図書館が**本当の意味での公共性を持つためには**、小千谷市民の〈わたし〉たちひとりひとりが提供されるサービスを待っているだけでなく、**公共とはなにかを問い続けること、与えに行くこと、参加することが必要**です。

このような施設に求められるのは、漠然とした〈みんな〉のために用意された空間や、すでに賑わっている空間、行政が用意した空間ではなく、ひとりひとりの**〈わたし〉が実感を持って参加できる空間**、目的の有無にかかわらず**居場所を見つけられる空間**、そしてそこに、**小さな〈わたし〉の領域たちが重なり育っていく空間**ではないでしょうか。したがって、ここに提案するのは以下のコンセプトを持った複合文化施設です。

1. 日頃から〈わたし〉が自由に居場所を見つけられる空間
2. それぞれの〈わたし〉が共に知ることを経験できる空間
3. 小千谷らしい「公共性」をつくるきっかけを持つ空間

こうして小千谷に住む〈わたし〉たちが、図書館との関わり方を通じて街にそれぞれの**〈わたし〉の活動を開いていく**ことで、〈わたし〉たちが育てていく場となるはず。そこで生まれる新しい図書館は、情報の保管場所としてだけでなく、さらに街の既存施設との連携を図ることで、**情報の収集と発信のハブ＝(知のプラットフォーム)**となっていくことが、小千谷市が目指す公共のあり方だと考えます。

特に重視する設計上の配慮事項

## 想定外を想定し日常的に災害に備える

中越地震の記憶がまだ新しい小千谷のために、できうるかぎり想定外を想定し、災害時に強い安全安心な建物を実現することを重視します。特に中越地震の後に降雪が重なったことを踏まえ、**1階をピロティとして地域に開放**することで、普段は地域のリビングとして、災害時は指定緊急避難場所として利用できる建築を提案します。

ピロティの中心にある「大きな風除室」は、雨風をしのげるバスの待合所であり、子どもが遊んだり井戸端会議ができる場所であり、四季を通して気持ちよく過ごすことのできる場所となります。**風除室内部には水場を設け、日頃から手洗いを推進して、感染症対策にも対応**すると同時に、災害時には炊出しに利用できる計画とします。**日常的に使われる場所を避難場所とすることでフェーズフリーな建築**を目指します。マイクロCGSによる非常電源や水源の確保、備蓄倉庫も整備します。

その他の業務上の配慮事項

## それぞれ違う〈わたし〉が関わる仕組み

ワークショップは市民の意見をヒアリングするだけでなく、市民が自ら決定するプロセスに参加することによって**より主体的に関わる機会**であるべきです。設計チームは、**小千谷リビングラボや官民連携アドバイザーとの創造的な**ワークショップを通じて、設計から運営まで継続的に関わり、使いやすく、愛着の持てる建築を目指します。また、西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオが八戸市新美術館の設計中に各識者にインタビューを行った経験を生かし、初期よりブログやポッドキャスト等のツールを使った設計プロセスの見える化やリサーチと設計の一体化に取り組みます。

こうして目指すのは、誰もが図書館を共有していながらすべての**〈わたし〉の価値観が違うことを前提にした建築**、さまざまな興味・関心を持つ〈わたし〉たちが重なっていく空間です。



専門サイトでの特集連載。美術館関係者、アーティスト、研究者等に幅広くインタビューした。

設計チームの特徴、業務取り組み体制

## 多様な専門性を備えたチーム体制

西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ設計共同体に、構造、設備、音響、ランドスケープの専門家と、情報環境技術と遊具設計の専門家を加えて、**施設の内外にわたって街との関係を構築するチーム編成**です。特に、建築専門誌のデータベース構築の実績があり、プログラミングスキルと建築設計経験も有するsunayama studioが実空間とデジタルの融合を担当します。音響設計の永田音響は国内外に多数の実績があり、シミュレーションを駆使して図書館の中に複数の活動が共存できるようなムラのある音環境を実現します。ランドスケープのHUMASは、地域の植生を用いた造園計画を行います。アンスは豊富な実績を生かして安全で楽しい遊具を計画します。

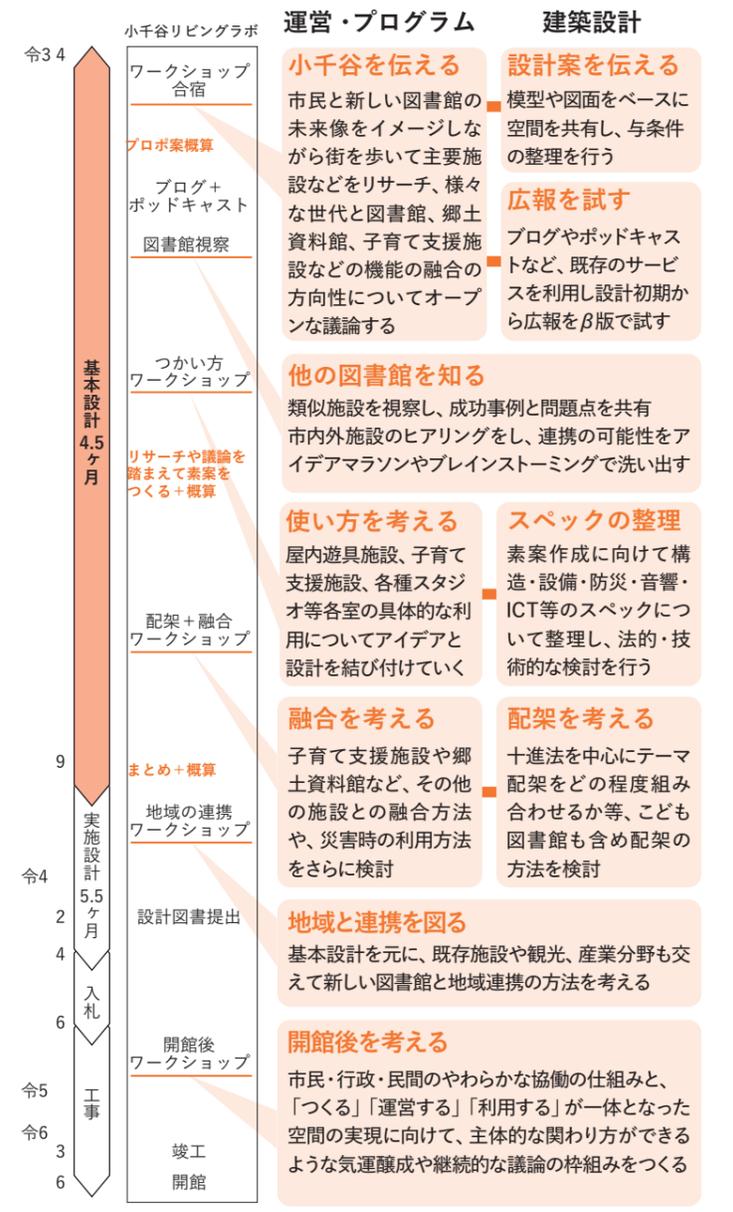
チーム体制図



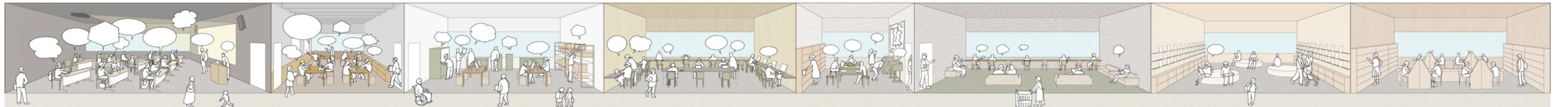
業務スケジュール

## 市民が主体的につくる場をつくる

「つくる」「運営する」「利用する」が**一体となった**空間の共創のプロセスには、市民の主体的な関わりしろをつくること、専門家も学びながら具体化していくことが必要になります。対話自体が設計になっていくようなオープンな場をつくります。



←にぎやか 活発で活動的な空間から閑かに集中したい空間まで、音環境や光環境、内装や家具デザインの違いによって雰囲気異なる部屋が共存・両立する図書館です。さまざまな〈わたし〉にとって、居心地のよい空間や関わりしろの選択肢を増やすことで、それぞれの〈わたし〉の領域が重なり、活動が交わっていきます。 閑か→



レクチャールーム：地域での相互の学びや生涯学習での利用など、多目的に使える部屋で、〈知のプラットフォーム〉を駆動させる空間です

WS ルーム：小さなグループで活発な議論を醸成します

デジタルスタジオ：3Dプリンターやレーザーカッターなど、ものづくりを通して知の共有を図ります

PC ルーム：WSの資料作成や個人の調べもの、イベントパンフの作成などの活動を支援します

リビングラホールーム：壁の一面に眺めのよい閲覧室：飲食が可能で、勉強やWSの休憩や談話など、大きな地図を張り出します

眺めのよい閲覧室：飲食が可能で、勉強やWSの休憩や談話など、ここので会話が新しい取り組みの契機となることもあります

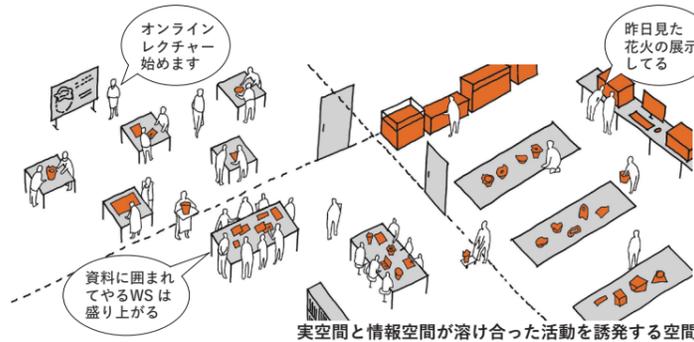
読書コーナー：ゆっくりくつろぎながら本を読む、落ち着いた部屋で、静かに本の世界へ没頭します

閑かな部屋：独立したブースで集中して読書や調べものができる部屋で、活動的な部屋からは離れています

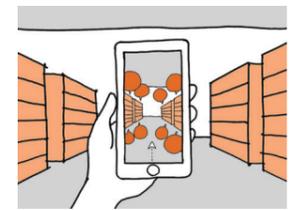
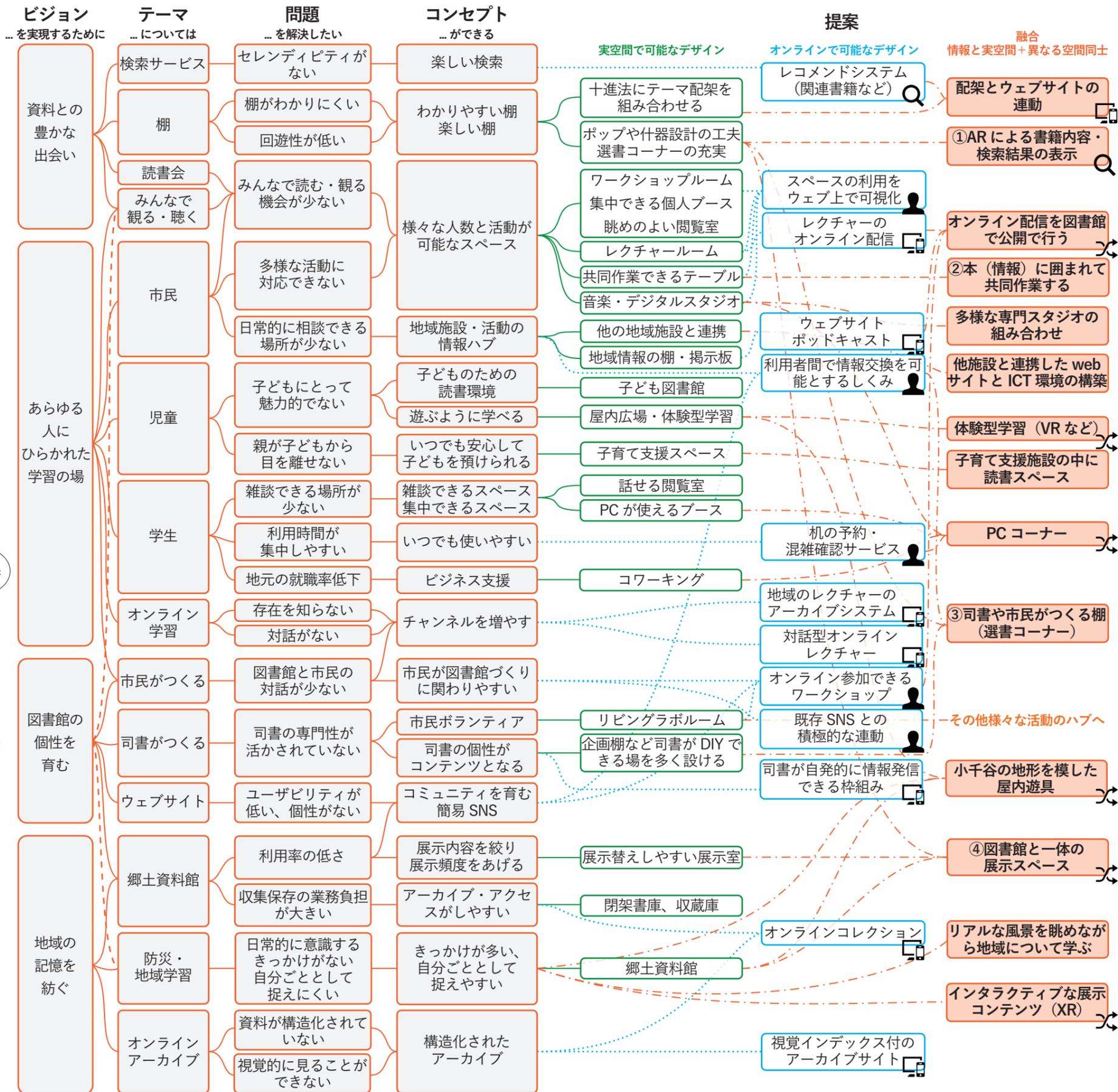
# 〈わたし〉とわたしの図書館

## 実空間と情報空間のマトリクス

実空間(建築)と情報空間(デジタル)のより本質的な融合を検討するために、マトリクスを作成しました。まず本計画では、図書館の**情報環境を情報技術のみで考えるのではなく、人と空間、人と物、物と空間、人と人の関係性が引き起こす出来事そのものを情報の束**として捉え、それらがシームレスに行き交う環境計画を主眼としました。そして、「資料との豊かな出会い」「あらゆる人にひらかれた学習の場」「図書館の個性を育む」「地域の記憶を紡ぐ」という4つを主な目的として、それぞれについてテーマを立て、問題を洗い出し、個々の問題に対応した明確なコンセプトをもつ情報空間を提案します。司書が自発的に本の並べ方を工夫し情報発信できる仕組みから、IDシステムを用いたユーザー間交流、インタラクティブな展示コンテンツの提案まで、これまで図書館が育ててきた知の蓄積・継承の仕組みをさらに拡張していくことになります。地域住民が、物理的な図書館の内外・オフライン/オンラインの枠組みを超えて環境格差を乗り越え、地域の知財に触れ、そこに新たな自分の居場所を発見し続けることができる環境を提供します。新たな図書館は、今以上に**情報が空間に溶け合った未来の暮らしを見据えた知と情報のプラットフォーム**になります。



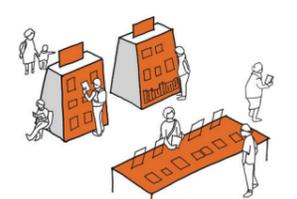
- 検索システム**  
利用者が借りたい本から類推されるレコメンドシステムや、ARによる書籍内容・検索結果の表示など、データベースと閲覧・検索環境を整備し、ユーザーの能動性を誘発するシステムを提案します
- 情報配信システム**  
レクチャーの配信や、配架情報のオンライン上での可視化、地域資源の視覚的なデジタルアーカイブなどを通じて、利用者に図書館情報を常にアクチュアルな形で提供します
- ユーザー ID システム**  
机・スペースの予約など施設管理や利用を便利にする機能をはじめ、利用者間や図書館との情報交換、SNSの積極的な連動など、利用者が帰属意識をもって図書館機能にアクセスできる仕組みを構築します
- メディアインストール**  
VRによる仮想体験学習やメディア・アート技術が実装されたインタラクティブな屋内遊具・展示コンテンツを計画し、それら情報技術がより実装しやすいような環境を構築します



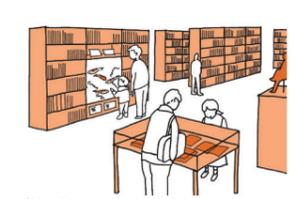
**①AR+実装しやすい空間**  
AR技術を使って、キーワード検索の結果がスマートフォン越しに書棚の上に出るなど、情報空間と実空間をスムーズに組み合わせる仕組みを提案します。その後のセンサー技術の発展を見据え、メインフロアをワンルームでXYZ軸が直行した、AIやセンサーが認識しやすい形状の部屋とします



**②活動的な図書館**  
静かな空間だけでなく、雑談も可能な場所を用意。音環境に配慮した空間づくりを行うと共に、電源とwifiを完備し、天井と床は配線をどこにでも取り回せる仕組みとします。騒々しさを許容することで、情報を知りたい人、知的好奇心がある人、問題意識がある人がそこで出会い、コミュニティ化し、オン/オフラインを超えて図書館の外へと活動が広がっていくことを誘発します



**③司書と市民がつくる本棚**  
司書による選書棚や、地域活動を行うグループや地域施設による展示と選書を一体で行う棚などwebのユーザーIDシステムと連動しながら、利用者間の情報交換が可能となる、分かりやすいだけでなく楽しめる棚をつくります

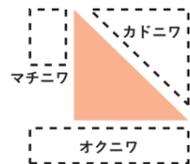


**④図書館と一体の展示スペース**  
郷土資料や地場産業の資料を図書館の棚に関連書籍と共に、物の資料と情報が一体となったメディアステーションを設置し、日常の中でインタラクティブに文化財に触れられる機会をつくり積極的に活用します

# 〈わたし〉がみつける図書館

## さまざまな活動を生み出す配置計画

本館を敷地中央に、駐車場を南西側に集約配置することで、性格の異なる3つのオープンスペースを確保します。小千谷駅からの来訪者を受け止める**カドニワ**、西脇邸方面からはピロティの**マチニワ**、眺望のよい南側に**オクニワ**です。カドニワでは「おぢやまつり」や、防災イベント、スタジオを開放してのライブイベントを開催することができます。**マチニワは冬季に屋外で子供たちが遊べる**十分な広さの屋根付き屋外広場です。オクニワは小千谷港を見下ろす眺望のよい広場で、二荒神社からのアプローチにもなっています。

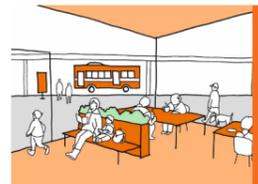


## 季節を問わず集まれるピロティ

本館への入り口は「**大きな風除室**」となっています。ここはカフェ、ダンススタジオ等のエントランスや、バスの待合も兼ねます。また、**感染症対策のほか、防災イベント時の炊き出しにも使える水場**を設けます。ガラスの「大きな風除室」はアーケードからオクニワまで視界が抜けるので、図書館利用者でなくても小千谷港を近くに感じることができます。



マチニワ：冬季にも屋外で遊べるよう、ピロティ空間で、柔らかい床材を用いることを検討します



カフェ：待合や休憩のほか、マチニワで遊ぶ子供たちを見守る保護者の談話スペースとして機能します



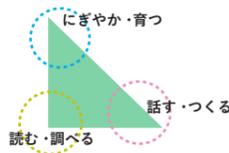
大きな風除室：待ち合わせや休憩のほか、防災炊き出しイベントやおぢやまつりなどを開催して普段から防災への意識を高めます

## 多様な居場所を見つけられる平面計画

2階は、センシングしやすい単純なグリッドでつくられる**さんかくライブラリー**の周囲に、閲覧室や各種スタジオ、大型遊具付き屋内広場、子育て支援室、郷土資料館など、将来的なニーズにフレキシブルに対応できる多様な種類の部屋が張り付く構成です。ここは**段差のないバリアフリーの大きなワンルーム**となっているため、〈わたし〉にとっての**さまざまな居場所の選択肢**が生まれ、また、どこにいても遠くに**別のだれかの存在**を感じることができます。一方で、3つの角で近接する活動は、より密接さを深めていくことになります。図書館機能をハブとしながら、さまざまな活動や時間の過ごし方が共存・融合していきます。

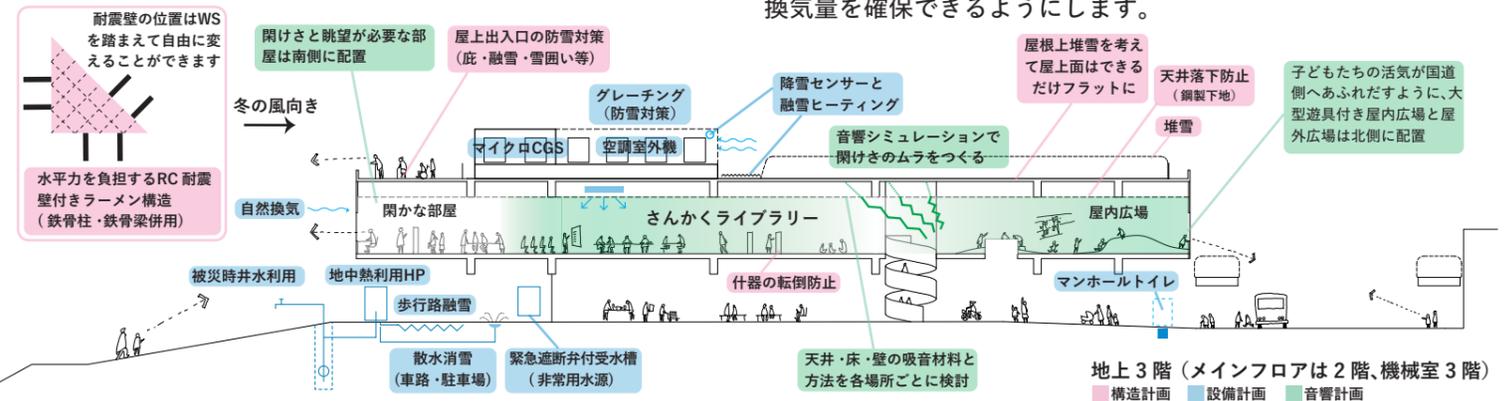
## ムラのある音響計画と居心地のよい空間

静かさの感じ方・心地よさは、響き方や雰囲気などの要因でひとそれぞれで違います。静かな場所で本を読みたい人や楽しく友達と勉強したい人など、**音環境において相反する過ごし方が両立できるように**、それぞれの居場所ごとに内装の素材や吸音性能、距離減衰を考ながらムラのある音環境をつくります。



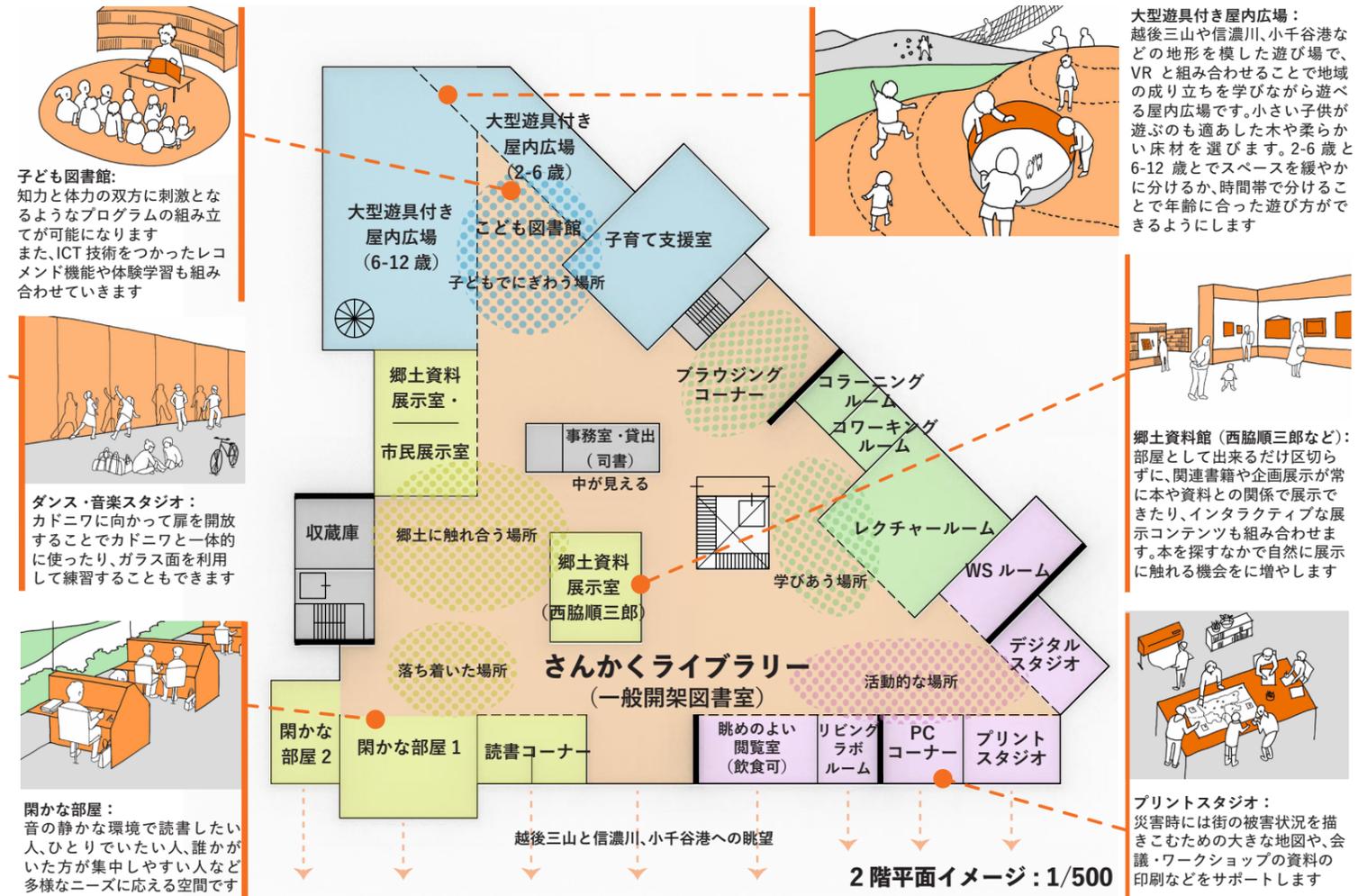
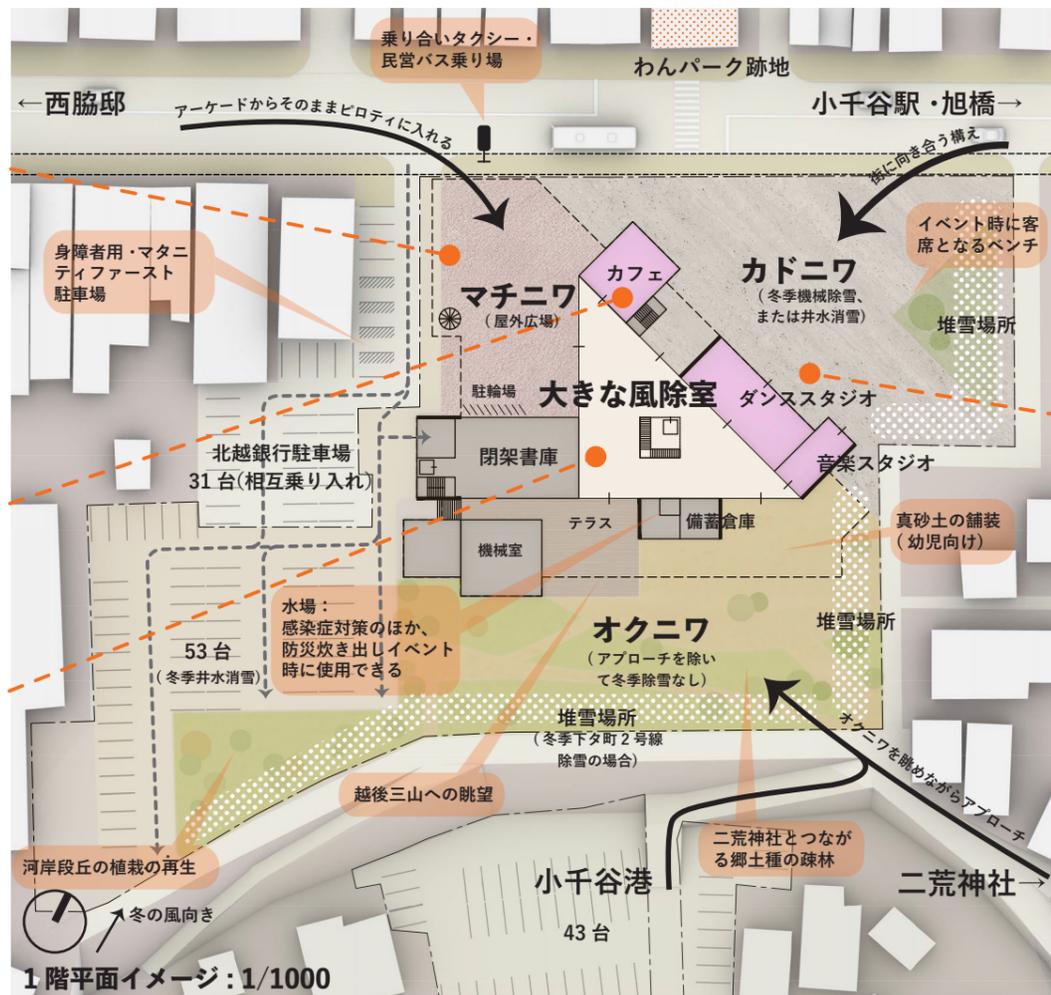
## 柔軟性のある平面が可能な構造計画

鉄骨梁・柱を併用した耐久性の高い**耐震壁付きラーメン構造**を提案します。耐震壁をバランスよく配置することで、揺れにくい構造とし、構造体の応答変位を小さくして**什器の転倒や天井の破損を防ぐ**、二次部材も壊れにくい構造計画です。鉄骨柱・梁を併用して柱本数を減らし、断面を小さく抑えることで、**大きな空間でも自由な平面を可能**にします。これにより、各部屋の組み合わせにも柔軟に対応することができます。**積雪荷重**に対しても鉄骨梁の剛性を最大限に利用し、コンクリートの弱点であるひび割れやクリープ変形の生じにくい耐久性の高い構造を目指します。



## 小千谷市エネルギービジョンに根差した設備計画

**小千谷市エネルギービジョン**を基に、省エネルギー化、CO2 排出量削減、太陽光発電、地中熱利用、再生可能エネルギーの利用量の「見える化」等について検討を進めます。また、恒温恒湿の収蔵庫には**雪資源の有効活用**や、モジュール化したマイクロCGSの導入で、排熱を給湯・暖房に有効活用することを検討し、**地産地消**も進めます。また、非常用発電機等を利用して、**被災時の長期停電時でも継続的に送電**ができるように配慮し、受水槽に緊急遮断弁を設置して水源を確保します。新型コロナ等の感染症対策については、**感染症蔓延防止のため、CO2センサーを設置**し、滞在人員数に合わせた換気量を確保できるようにします。



子ども図書館：知力と体力の双方に刺激となるようなプログラムの組み立てが可能になります。また、ICT技術をつかったレコメンド機能や体験学習も組み合わせさせていただきます

ダンス・音楽スタジオ：カドニワに向かって扉を開放することでカドニワと一体的に使ったり、ガラス面を利用して練習することもできます

開かな部屋：音の静かな環境で読書したい人、ひとりであったり誰かがいた方が集中しやすい人など多様なニーズに応える空間です

大型遊具付き屋内広場：越後三山や信濃川、小千谷港などの地形を模した遊び場で、VRと組み合わせることで地域の成り立ちを学びながら遊べる屋内広場です。小さい子供が遊ぶのも適した木や柔らかい床材を選びます。2-6歳と6-12歳とでスペースを緩やかに分けるか、時間帯で分けることで年齢に合った遊びができるようになります

郷土資料館(西脇順三郎など)：部屋として出来るだけ区切らずに、関連書籍や企画展示が常に本や資料との関係で展示できたり、インタラクティブな展示コンテンツも組み合わせます。本を探すなかで自然に展示に触れる機会を増やします

デジタルスタジオ：災害時には街の被害状況を描きこむための大きな地図や、会議・ワークショップの資料の印刷などをサポートします

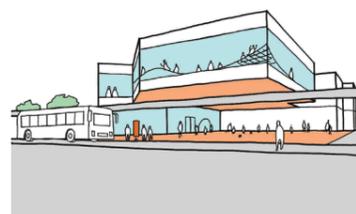
# 〈わたしたち〉の図書館と小千谷の街

わんパーク跡地



設計中はリビングラボ・設計分室として使い、図書館完成後は民具や縄文土器、西脇所蔵本などの収蔵展示スペース、本の返却ポストなどとして使うことを提案します。本館のサテライトとして機能させることで、街への波及効果を狙います

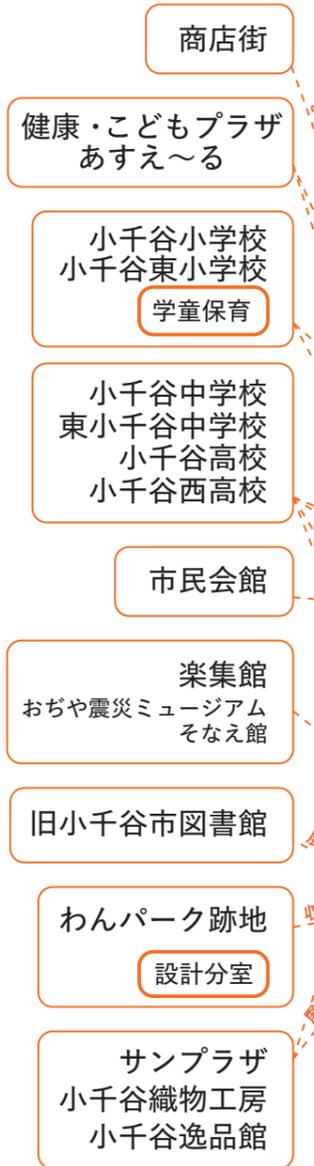
マチニワ



マチニワはアーケードと連続する屋根付きのバスの待合所や屋外広場として使われるとともに、その上の屋内広場で遊ぶ子どもたちの様子が国道側から見える構成とします

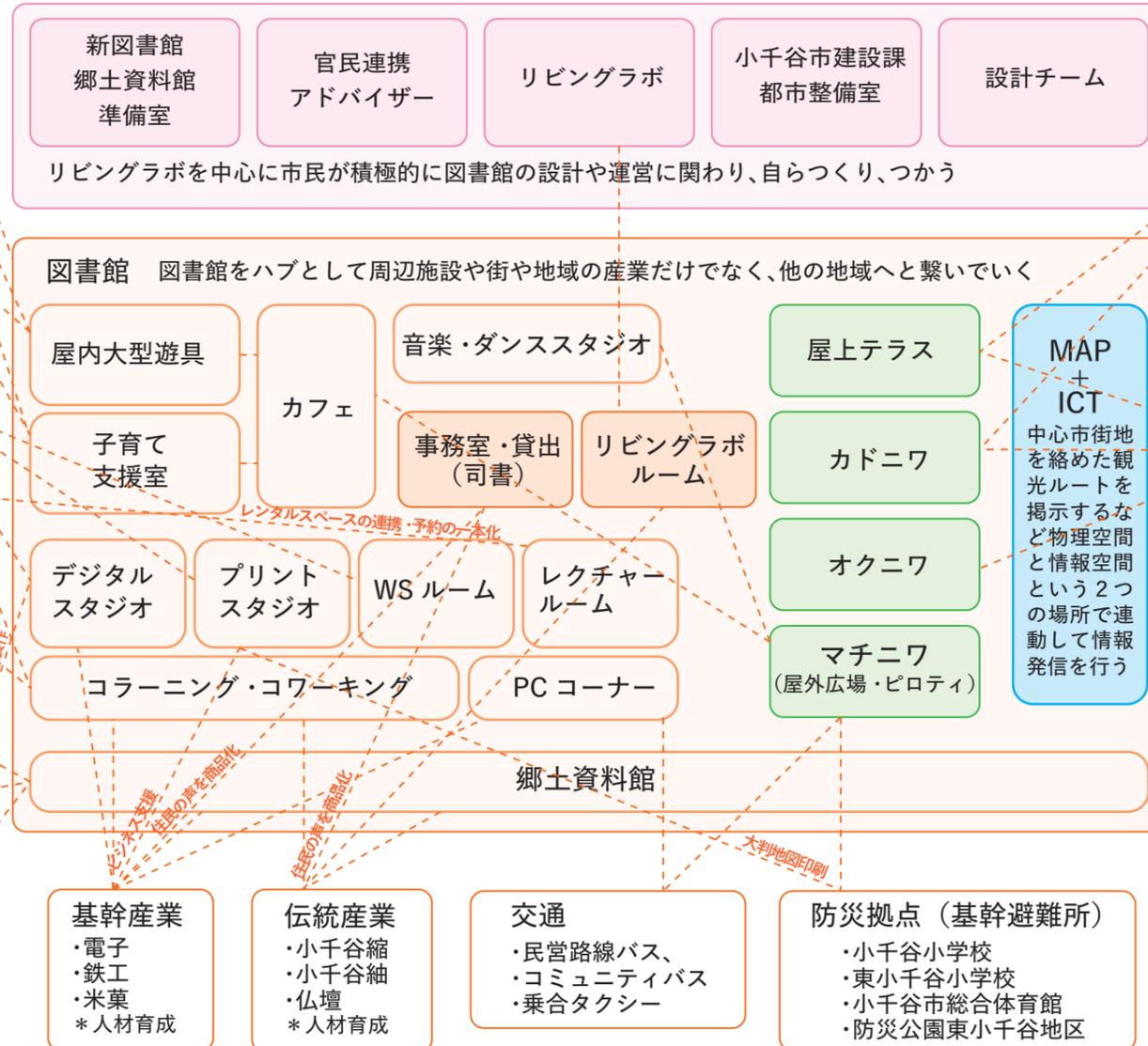
旧小千谷図書館：今後増えていく所蔵品の収蔵スペースを図書館内に集約するのではなく、分散所蔵していくことは必要だと考えます。不特定多数の利用がなく、十分に安全に配慮した上で、小千谷市の新たな所蔵スペースとして再利用することも検討します

## 日常的な学びと遊びの拠点

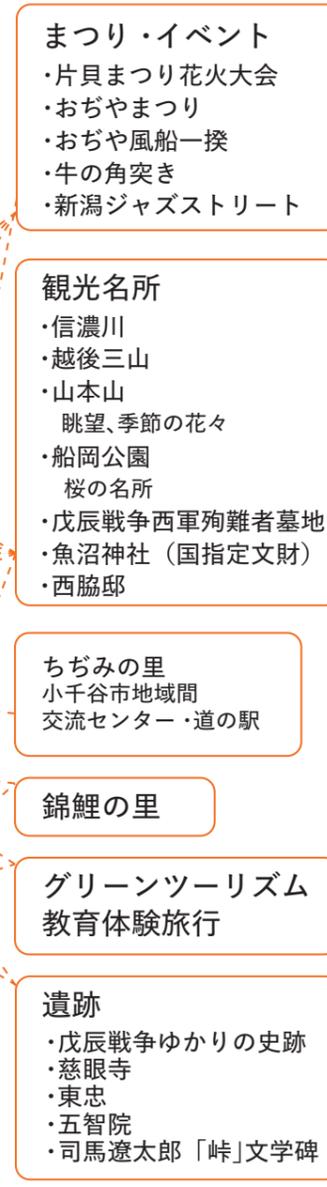


## エリアマネジメントの関係図

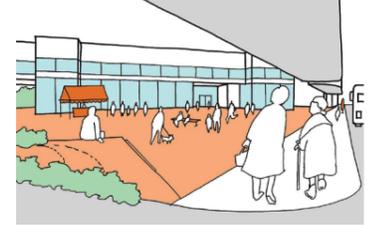
### ハブとしての小千谷市図書館・郷土資料館



## 観光・生涯学習

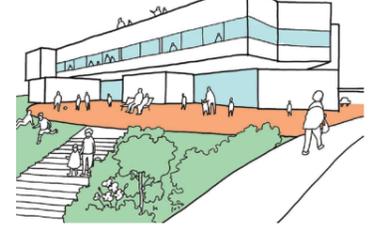


カドニワ



旭橋から市内中心部へ入ると、アーケード越しに街に開かれた広場が現れます。おぢやまつりの本町おまつり広場としてや、ジャズイベント会場としてなど、街の賑わいの起点となる活動と図書館を結び付けます

オクニワ



二荒神社側からのアプローチは、小千谷港に向けて傾斜のあるオクニワが迎えます。図書館内・屋上からは信濃川やおぢやまつりの花火大会を見ることができます

眺めのよい閲覧室



高台にある眺めのよい閲覧室からは、河岸段丘や越後三山など、目の前のリアルな風景を眺めながら地域の歴史や地理を知ることができます

## 小千谷の知の共有地

縮の産地として発展し、教育の街、病院の街と引き継がれてきた小千谷に新たに期待されているのは、暮らしをリ・デザインする未来思考の図書館です。これは単に本が並んだ場所ではなく、郊外の施設に流れた若年世代の居場所、増加した共働き世代には安全安心に子どもと遊べる場所、高齢世代には生涯学習の場所であるような、いわば拡張した図書館です。ここでは、それぞれの〈わたし〉どうしの領域が重なり合い、〈わたしたち〉にとっての〈知の共有地〉= ハブとしての小千谷市図書館・郷土資料館となっていきます。

## 情報環境のハブ

高度な情報環境を備えるこの図書館は、未だデジタル化されていない地域の文化・産業の既存システムやICT環境を補完し、様々な地域サービスを横つなぎにします。デジタルスタジオやワークショップルームは、市民が生活の一場面の中で情報技術を介した学習や実験に容易にふれることができる——発想次第で想像の自由度が拡がり、共創を生む——砂場のような場所を目指します。地域の学校や産業などと連動した学習機会を、できるだけ容易に提供できる情報環境を準備することで、将来的な人材、知財を地域内で生み育てていくエコシステムを形成します。

## 小千谷の街の賑わいと交流のハブ

わんパーク跡地や旧小千谷市図書館跡地の再利用も新しい図書館機能の一部として捉えること、また、マチニワがバスの待合スペースに、大きな風除室が市民のリビングや憩いの場に、カドニワは災害時の防災拠点になることなど、建物に閉じずに地域に開いていく拡張性や広がりをもたせることで、賑わいと交流のハブとなります。さらに、竣工後も図書館内にリビングラボのスペースを確保することで、新しい図書館は設計プロセスから始まる小千谷のまちづくりの継続的な拠点になっていくことができます。

## 公民連携のハブ

地場産業である鉄工電子や米菓の紹介展示や、市内企業向けの補助金・公募プロジェクト支援、地域住民の声を商品化するビジネス支援は、今後の図書館の大きな役割になると考えます。学生が地場の産業に日常的に触れることでUターン人口増加を促します。民間活力を活かしたカフェ運営や生活インフラである商店街と知のインフラである図書館の連携など、エリア全体で機能を分担し、それぞれが新しい関わりしるを用意していくことで、縦割りを超えた「小千谷モデル」というべき独自の公民連携の形を生み出す契機となりえます。

## 観光・生涯学習のハブ

地域の豊富な情報に囲まれ、気軽に話せる雰囲気を持つこの図書館は、地域住民にとっても観光客にとっても街の歴史や文化について学び交流できる場となります。本棚に並ぶ本の中に郷土資料や民具などを組み合わせ展示することで、情報に触れると名所や現物に触れたいくなるような、地域資源への小窓となっていきます。また、さんかくライブラリーや屋上は越後三山や信濃川を一望できる市内随一の眺望スポットであり、好奇心の循環が起こるハブとしての図書館それ自体が、観光名所となっていくはずはです。